

英語の文代用形に関する覚え書き

著者	大村 光弘
雑誌名	静言論叢
巻	4
ページ	15-32
発行年	2021-03-31
出版者	静岡大学言語学研究会
URL	http://doi.org/10.14945/00028108

英語の文代用形に関する覚え書き

大村光弘

キーワード：文代用形，指示，発話階層構造，モダリティ

1. はじめに

本稿が扱う言語現象は、英語に見られる文の代名詞化である。すなわち、先行する文を繰り返し用いることを避けるために、文代用形である代名詞を用いる文法的手段である。例えば、(1)において文末に現れている代名詞 *it* は、先行する文の斜体部分に対する代用形として用いられている。言い換えれば、*it* は斜体部分の節を前方照応的に指し示している¹。

(1) My mother used to say *you can catch more flies with honey than you can with vinegar*, and I guess I still believe *it*.

(King, *The Stand*, Ch.14)

節を代用できるのは *it* に限ったことではない。例えば、*so* も、先行する節を指し示すことがある。アガサ・クリスティの『報復の女神』から引用した以下の場面では、三姉妹の長女が用いている *so* が、マーブルの発話にある斜体部分を前方照応的に指し示している。

(2) MISS MARPLE: A beautifully proportioned house. Your sister tells me *it was built about 1780*.

C. BRADBURY-SCOTT: Yes, I believe *so*. One could wish, you know, it was not

¹ 本稿では一貫して、例文内の代用形に下線を施し、その先行詞(antecedent)に当たる部分を斜体で表記する。

quite so large and rambling.

(Christie, *Nemesis*, Ch.8)

議論を進める上での叩き台があった方が都合がいいので、次節では、英語の文代名詞化 (sentence pronominalization) 現象を扱った代表的な先行研究である Cushing (1972) を取り上げる。争点となるのは、「it と so の分布を語彙情報のみから説明できるのか」である。Cushing は、これらの文代用形の選択において、動詞の補文選択に課せられる意味的条件が重要な役割を果たしていると主張する。it か so かの選択は、基本的にこの動詞の意味特性に基づいて行われる。本稿は、動詞の意味に言及はするものの、言語を使用し、解釈する主体としての人間の判断や、文脈からの影響も考慮に入れた、認知意味論的分析を提案する。

2. Cushing (1972) の文代名詞化の分析

Cushing (1972) は、英語の文代用現象において、(3) のように it (のみ) が用いられる場合と、(4) のように so (のみ) が用いられる場合があることに着目し、これらの文代用形の選択が、(5) と (6) のような名詞代用形の it と one にそれぞれ対応すると考えた。

- (3) Paul suggested that *sentence pronominalization might depend on factivity* and Carol suggested { it / *so } too. (Cushing (1972: 191))
- (4) He said that *someday we would prove the existence of deep structure*, and I said, 'I hope { so / *it }.' (ibid.: 186)
- (5) Pythagoras proved *the theorem* and Euclid proved it too. (ibid.: 186)
- (6) Pythagoras proved a *theorem* and Euclid proved one too. (ibid.: 186)

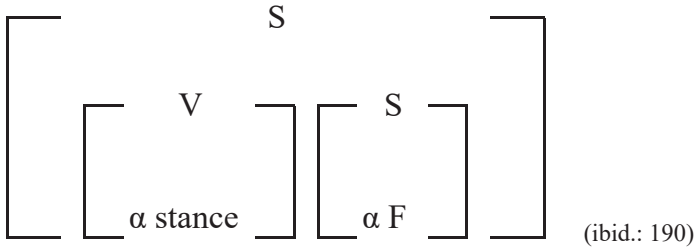
この着想を言語学の立場から形式化するため、Cushing は、定名詞句がもつ特性 [+definite] に対応させて、特定の補文がもつ特性 [+F] を想定する。[+definite] をもつ名詞句が it によって代名詞化されるのと同様に、[+F] をもつ節が it によって代名詞化されるという筋書きである。次に、[+F] をもつ特定の補文とは何かという、それは、特性 [+stance] をもつ述語が従える補文を意味する。[+stance] をもつ述語とは、「その主語が補文の真理値に対して明確な立場をとる (adopting a definite stance with respect to the truth or falsity of the following S; p.188)」という

意味をもつ述語をいう。

以上の想定が与えられると、[+stance]をもつ述語だけが[+F]をもつ補文を従えることになり、この[+F]をもつ補文だけが、itによって代名詞化されうることになる。一方、[-stance]をもつ述語とはいえば、[-F]によって特徴づけられる補文のみを従えることになる。[-F]をもつ補文は、so/notによってのみ代名詞化を受ける。この種の補文は、[-definite]によって特徴づけられる不定名詞句に対応する。但し今回は、名詞句と文とで代名詞化の形式が異なっている。つまり、[-definite]をもつ名詞句に対する代名詞はoneであり、[-F]をもつ節に対する代名詞はso/notである。Cushingは、この非対称性について何も言及していない。

Cushing (1972)は、文代用形の選択において利用される、語彙意味論的条件を次のように定式化している。

(7) 文代用形の選択に課せられる意味構造条件



外側のSは母型節を表し、母型節は動詞（V）とその補文（S）を含む。動詞（V）のstance素性に+の値が指定されれば、その動詞は補文の真理値に対して明確な立場をとる意味をもつとともに、[+F]の補文を従えることが要求される²。一方、αに-の値が指定されれば、動詞は補文の真理値に対して明確な立場をとらない意味をもつとともに、[-F]の補文を従えることが要求される。

(3)と(4)に対して、意味構造条件(7)を適用してみよう。(3)のsuggestは[+stance]と指定されるので、その補文は[+F]をもつことが要求される。結果として、文代用形がsuggestに後続する場合は、itが選択されなければならない。一方、(4)のhopeは[-stance]と指定されるので、その補文は[-F]をもつことが要求される。

² Cushingは、[F]が指定される言語レベルをD構造だと想定している。D構造を認めるかどうかはさておき、このことは[F]が[stance]とは異なり、語彙的に指定されるのではないことを意味する。おそらく、計算体系(computational system)によって統語部門で挿入されることになるであろう。

結果として、文代用形がhopeに後続する場合は、soが選択されなければならない。

意味構造条件(7)における特性[stance]に関して、基本的に、 α には+/-のどちらかの値が指定されるのだが、動詞believeは例外である。これは、[+stance]のbelieveと[-stance]のbelieveの二種類が存在するからである。Cushingによれば、(8)のbelieveに後続する文代用形はitでなければならない。つまり、(8)のbelieveは[+stance]の意味であり、したがって、その補文も[+F]となる。

(8) Noam said that *deep structure exists*, and I believed { it / *so }. (ibid.: 186)

一方、(9)では、believeに後続する文代用形はsoでなければならない。つまり、(7)のbelieveは[-stance]の意味であり、したがって、その補文も[-F]となる。

(9) George asked me whether *deep structure exists*; I said that I believed { so / *it}. (ibid.: 186)

以上がCushing (1972)の主張の要約である。ここからCushingの分析に対する疑問点を指摘していくことにしよう。まず初めに、文代用形のsoについて考えてみよう。文代用形のitが名詞代用形のitと機能的に類似しているという見方には同意する。なぜなら、両者は同形態であり、どちらも既知の実体を指し示すからである。では、oneとsoの関係はどうだろうか。両者とも、タイプ同一指示(type-coreferentiality; Cushing (1972: 186))に関わるという点で共通していると思われるが、最終的なCushingの主張は、補文の[-F]に帰結している。なぜ[-F]の補文がタイプを表すのであろうか。[-F]補文を選択する[-stance]動詞とタイプ命題の関係もいまひとつはっきりしない。このこととは別に、soには対を成す別形式のnotが存在するが、名詞代用形とは形態的に異なる二つの代用形式が存在することも説明されていない。

(10) KELLY: Don't you know *they'll be watching all the airports*?

DIANE: I hope so.

(Sheldon, *Are You Afraid of the Dark*, Ch.34)

(11) OLIVER: I swear *I don't know anything about what happened*.

TODD: I hope not.

(Sheldon, *The Best Laid Plan*, Ch.6)

第二に、Cushingの論法では、[+stance]の動詞は必ず[+F]の補文を取り、[+F]の補文はitによる代用のみ許されるが、典型的な[+stance]動詞であるsayやtellにso代用形が後続する例を見つけるのはたやすい。

(12) A: *The Finance Minister has resigned.*

B: Who said so? (Quirk et. al (1985: 868))

(13) *Oxford is likely to win the next boat race. All my friends say so.* (ibid.: 880)

(14) *Jack hasn't found a job yet. He told me so yesterday.* (ibid.: 880)

第三に、Cushing (1972)で言及されている文代用形とその先行詞の例は、その全てが[αF]補文と[αF]補文の対になっている。注目すべきは、先行詞が全て補文である点だ。Cushingは常に[±F]節を母型動詞の[±stance]特性と関連づけているので、自ずと、先行詞の統語形式が補文となる。[±F]が補文以外の環境に付与されるのかどうか、付与されるとしたらそれは何故か、など疑問は尽きない。それどころか、(15)-(17)を見ると(12)-(14)がそうであるように、そもそも文代用形は、主節を先行詞にとることができると考えた方がよいようだ。

(15) DEVINS: You were afraid for your life, in fact.

LLOYD: I don't think it was-.

DEVINS: (*You were*) terrified. Believe it, Sylvester. You were shitting nickels.

(King, *The Stand*, Ch.14)

(16) WEIZAK: *Will that thing get you there?*

THE JUDGE: Oh, I believe so, if I steer clear of the main-traveled roads.

(ibid., Ch.55)

(17) JESS: You had the pill, you said. I took you at your word. Was I so wrong?

FRANNIE: No. You weren't so wrong. But *that doesn't change the fact*.

JESS: I guess not.

(ibid., Ch.2)

最後に、私が³Cushing (1972)の例文の妥当性についてアメリカ人の同僚（アメリカ文学専門）に尋ねたときの、彼のコメントについて言及しておきたい。彼

は、(18)で意図されている同一指示関係が不自然に感じるという。また、文脈を与えてitが母型節全体を指し示すようにすると、全体の印象が改善されるという。

(18) Noam said that *deep structure exists*, and I believed it.

3. 提案

3.1 文代用形のitが指し示すもの

まず最初に、文代用形のitが指し示す実体について、私の考えを述べておくことにする。すでにふれたように、文代用形のitは、名詞代用形のitと同形態であり、機能面でも類似性が高い。どちらもすでに談話に登場している、既存の実体を指し示すからである。もう少し具体的に言うと、私は、文代用形のitについて(19)のように考えている。

(19) 話し手（書き手）が事態pを<存在物>として見立てるとき、話し手（書き手）は、pを代用形itを用いて指し示すことができる。

なお、話し手（書き手）は、発話時において、事態pがI-IIIの何れかの条件を満たすとき、pを<存在物>として見立てる。

条件 I 母型動詞がある種の伝達行為を表しており、その補文が事態pを既述しているとき。

補文を従える母型動詞がある種の伝達行為を表す場合、その補文命題は、その伝達行為を補完する働きをする。伝達行為が遂行されると、その行為は、発生したが故に談話の中に提示されたことになり、そこに存在するモノと見なされる。結果として、当該伝達行為の一部である補文命題もモノの一部と見なされ、二次的ではあるが、モノと見なされる。

Cushing (1972: 187-188)で言及されているほとんどの例が、上述の条件 I に当てはまる。彼は、(20)-(27)のa文で用いられている動詞が、b文の太字で示されたような、ある種の行為を意味していると分析する³。

³ 本稿では、believeが行為を表しているとは考えない。

- (20) a. Newton hypothesized that *infinitesimals exist* and Leibniz hypothesized it, too.
 b. Newton **proposed the hypothesis** that infinitesimals exist.
- (21) a. Euclid postulated that *parallel lines never meet* and Hilbert postulated it, too.
 b. Euclid **adopted the postulate** that parallel lines never meet.
- (22) a. Riemann suggested that *parallel lines really do meet* and Einstein suggested it, too.
 b. Riemann **made the suggestion** that parallel lines really do meet.
- (23) a. Cohen proved that *the continuum hypothesis is independent of the axioms of Zermelo-Fraenkel set theory* and Cantor would have wished that he had proven it if he had known.
 b. Cohen **constructed the proof** that the continuum hypothesis is independent of the axioms of Zermelo-Fraenkel set theory.
- (24) a. Lakoff announced that *he had proven that deep structure does not exist* and Ross announced it, too.
 b. Lakoff **made the announcement** that he had proven that deep structure does not exist.
- (25) a. Harris asserted that *transformations are necessary in linguistics* and Chomsky asserted it, too.
 b. Harris **made the assertion** that transformations are necessary in linguistics.
- (26) a. Holmes deduced that *the butler had done it* but Watson was unable to deduce it.
 b. Holmes **made the deduction** that the butler had done it.
- (27) a. Hornstein believes that *unemployment is hereditary* but no serious scholar believes it.
 b. Hornstein **gives credence to the belief** that unemployment is hereditary.

さらに、(28)に引用したように、この種の動詞には[+stance]が与えられると言う。

- (28) We see that the meanings of the main verbs [in (a) sentences] each involves a notion like ‘propose’, ‘adopt’, ‘make’, ‘construct’, or ‘give credence to’, plus an NP related to the verb. Each of these notions refers to a specific kind of act, mental or otherwise, performed on the referent of the NP and its complement S. The complete italicized expressions [in (b) sentences] all involve the subject in adopting a definite stance with respect to the truth or falsity of the following S.

Cushing は意味構造条件(7)を想定するので、当該動詞の補文として[+F]の節のみが許されることになる。彼はこのようにして、(20)-(27)のa文に見られる同一指示関係を説明する。しかし、(28)を見ても、当該動詞と[+stance]の関係が明確に示されていないと、私には思われる。また、意味構造条件(7), [stance], [F]を想定しないで済むのならば、すなわち、文の照応現象が他の独立した原理から説明できるのであれば、その方が良いように思われる。

すでに述べたように、本稿の分析は、そういった道具立てに訴えることなく、問題となっている照応関係を説明できる。もう一度繰り返すが、補文を従える母型動詞がある種の伝達行為を表す場合、その補文命題は、その伝達行為を補完する働きをする。伝達行為が遂行されると、その行為は、発生したが故に談話の中に提示されたことになり、そこに存在するモノと見なされる。結果として、伝達行為の一部である補文命題もモノの一部と見なされ、二次的ではあるが、談話に存在するモノと見なされる。したがって、伝達行為を意味する述語の補文間で照応関係が意図される場合、文代用形のitが選択されるのである。

ここで、(29)=(18)を再び考察してみよう。

(29) Noam said that *deep structure exists*, and I believed it. (=18)

(29)の第一等位項の母型動詞は伝達行為を意味する。その補文は、この伝達行為を補完する働きをする。この伝達行為もその補文も、談話に存在するモノとして見立てられることによって、itで指し示すための資格をえる。このようなときには、話し手（書き手）にとって、より情報的価値が高い方が優先される。(20)-(27)のa文のように、第一等位項と第二等位項で同じ動詞を用いたときは、文代用形のitが何を指し示すかに関して選択肢は生まれぬ。

(29)では、状況が異なる。生成文法学者にとって、Chomskyが何かを言った(Chomsky said something)という凡庸な事態と、深層構造が存在する(deep structure exists)というテーゼでは、たとえ両者が<存在物>と認識されている状況でも、当然後者の情報的価値の方が高い。したがって、そのような話し手（書き手）にとっては、(29)=(18)のitが補文命題を指し示すのである。この時のbelieveは、以下で言及する条件Ⅲに当てはまるが、ここでは詳細を論じない。思い起こしてほしいのは、私のインフォーマントの一人である、アメリカ文学研究者

のコメントである。彼は変形生成文法の知識が無いので、彼にとって補文の命題内容は単なる仮定や記述にすぎない。さらに、彼にとって、自分が当該テーゼに対する信念を表出する状況は想像に難い。かといって、主節全体をitで受けるような適切な文脈(すなわち、何かを言うことが意味をもつような文脈)が与えられていないので、結果として彼は、(18)で主張されている同一指示関係に対して不自然な印象を覚えたのであろう。

同様の説明が例文(30)(=(1))にも当てはまる。

(30) My mother used to say *you can catch more flies with honey than you can with vinegar*; and I guess I still believe it. (= (1))

(King, *The Stand*, Ch.14)

(29)(=(18))と同様(30)(=(1))でも、文照応形のitがbelieveに後続しており、このitは、先行する補文命題を前方照応的に指し示している。話し手にとって、母親が何かを言ったという出来事も、その教訓的内容も、談話に存在するモノではあるが、文脈上後者の情報の価値の方が遥かに高い。したがって、聞き手(読み手)も、自分が話し手(書き手)の立場に立ったとき、意図する同一指示関係を自然な流れの中で解釈することができるのである⁴。

最後に、(31)に見られる照応関係を分析してみたい。

(31) HARRY: But *won't they notice* if you shut your ears in the oven door?

DOBBY: Dobby doubts it, sir. (Dobby doubts they will notice)

(Rowling, *Harry Potter and the Chamber of Secrets*, Ch.2)

まずは、ハリーの発話に目を向けてみよう。ハリーが用いているのは、否定疑問文である。否定疑問文を使うとき、話し手は、自らの期待とは異なる結果が与えられたことで、元々の想定 of 正しさを期待しながら、その真偽について質問する。これは、否定疑問文に文法化された構文意味である。(31)の場合、ハリーの想定は、ドビーの主人がドビーの行動に気づくであろう(they will notice)ことである。ドビーは否定疑問文の構文的機能から、ハリーの期待に気づく。

⁴ 真偽判断を意味する動詞であるbelieveには、話し手の信念の強さにしたがって、itか、またはsoが後続する可能性があるが、第一等位項の補文は主張された命題というだけでなく、話し手にとっての教訓にもなっているので、<存在物>として認識しやすいのであろう。

その上で、その期待を否認している。ここでは、否定疑問文を使った質問行為が遂行され、その一部となっている特定の事態が、構文意味として談話に提示されている。つまり、前提命題が〈存在物〉として見立てられているのである。今回のような否認態度も含め、命題内容の真偽についてその是非を認定する場合、是非判断の対象となる命題は、発話時点で先立ってすでに談話の世界に提示されていなくてはならない。そうでなくては、話し手は是非判断を下せないからである。是非判断を表す動詞の補文が常に規定的命題(pre-established proposition)を表すことの帰結として、この種の補文が文代用形によって置き換わるときは、常にitが選択されることになる。

(32)=(27a)の第二等位項において、母型動詞のbelieveは、否定辞を伴う主語と相まって、否認態度を合図すると想定できるかもしれない。もしそうなら、(32)の第二等位項において、believeの補部に文代用形のitが選択されていることが説明できる。

(32) Hornstein believes that *unemployment is hereditary* but no serious scholar believes it.

話し手がHornsteinの信念を報告できているということは、発話時において、何らかの経緯（たとえば、Hornsteinが発言しているのを実際に聞いた、など）によって、その知識を得ていたことを意味している。このとき、話し手にとって、第一等位項が表す事態全体も補文の表す事態も、談話に存在する〈存在物〉と見なされるが、第一等位項の母型動詞も第二等位項の母型動詞も、同じbelieveである。したがって、情報的価値の点から、itが先行する補文命題を前方照応的に指し示す解釈が顕著となる。

つぎに、(19)に対する二番目の条件に議論を移そう。条件IIは、事態pの真实性を前提としているとき、話し手（書き手）は、文代用形itを用いてpを指し示すことができるというものである。

条件II 話し手（書き手）が、pの真实性を前提としているとき。

事実は、すでに発生（あるいは、成立）しているが故に、談話の中に存在しているモノと見なされる。このようなpは、典型的に、叙実動詞(factive verb; Kiparsky and Kiparsky (1971))の補文として現れる。

(33) John regretted that *Bill had done it*, and Mary regretted it, too.

(Kiparsky and Kiparsky (1971: 362))

最後に、(19)に対する三番目の条件を考察してみよう。条件Ⅲが述べているのは、事態*p*の真実性を確信しているとき、話し手（書き手）は、文代用形*it*を用いて*p*を指し示すことができるというものである。

条件Ⅲ 話し手（書き手）が、*p*を事実だと確信しているとき。

命題*p*の真実性に対する確固たる信念によって、*p*は擬似的な真実と見なされる。話し手の主観的判断によって*p*の指示性が高まった結果として、*p*は談話に存在しているモノと見なされる。条件Ⅲは、真偽判断を表す述語が文代用形の*it*を従えている例に当てはまる。

(34) Noam said that *deep structure exists*, and I believed it. (= (29))

(35) DEVINS: You were afraid for your life, in fact.

LLOYD: I don't think it was-.

DEVINS: (*You were*) *terrified*. Believe it, Sylvester. You were shitting nickels.

(King, *The Stand*, Ch.14)

3.2 文代用形の *so/not* が指し示すもの

3.2節では、議論を *so* と *not* に移す。この二つの代用形式は、*it* と同じような文代用形に見えるが、実際は別物である可能性が高い。そのことを検証するために、発話階層構造 (Layered Structure of the Utterance) の考え方に基づいて、発話の重層構造を想定する。さらに、中右 (1994) の *so* と *not* の分析を採用し、これらの言語形式の役割と、これらの言語形式が用いられる代用現象の本質を検討したい。

3.2.1 発話階層構造

機能文法 (Functional Grammar; (Dik (1997), Hengeveld (1989, 1990), etc.), 中野 (1993), 中右 (1994) 等の意味分析に共通しているのは、発話の意味が、事態を描写する客観的領域と、心的態度を担う主観的領域に二分されるという主張である。本稿でもこの基本的想定を踏襲するとともに、発話の意味構造を概略 (36)

のように想定する。

(36) 発話階層構造(The Layered Structure of the Utterance) :

[発話伝達態度 [命題態度 [命 題]]]

< 主観的領域 >
(モダリティ)

< 客観的領域 >
(事態描写)

(36)では、発話の意味構造が階層を成しており、中心に命題(proposition)が、その外側に命題を作用域(scope)とする命題態度(propositional attitude)が、その外側にこれらを作用域とする発話伝達態度(utterance attitude)がある。命題は、言語表現によって記述される事態描写であり、文意味の客観的領域を形成する。命題態度と発話態度は、話し手の心的態度を担う主観的な領域である。本稿では、中右(1994)の用語を借りて、この主観的領域をモダリティ(modality)と呼ぶ。モダリティの定義は、(37)に示したように、発話時点における話し手の心的態度となる⁵。

(37) モダリティ：発話時点における、話し手の、心的態度

(中右(1994: 42-46))

命題態度は、話し手が発話時点において命題内容に対してとる信任態度のことであり、真偽判断(truth judgment)、価値判断(evaluative judgment)、拘束判断(deontic judgment)などがこれにあたる。発話態度は、談話領域レベルでの話し手の態度表明を意味し、発話様態(manner of speaking)に関わる態度や談話形成に関わる態度などがこれにあたる。

3.2.2 真偽判断を表す動詞の補文と so/not

この節では、中右(1994)の分析を紹介するが、そこで言及する言語理論やそ

⁵ モダリティを形成するこれら3要素には重要度の違いがあり、心的態度、話し手、発話時点の順で優先順位が下がる。また、発話時点は瞬間的現在でなくてはならず、習慣的現在など記述的性質が強いものは瞬間的現在から締め出され、定義上、命題成分として分類される。詳細については、中右(1994: 3章)を参照されたい。

の表記法に関しては、私の用いている道具立てとの共通点もあるが、相違点も数多く存在する。したがって、読者に対してある程度の混乱を生じさせてしまうことが予想されるが、以下の議論では、両者の違いについての詳細な説明は極力避け、説明上必要な最低限の解説に留めることとする。

中右(1984: 12章)は、(38Ba, b)に見られる最小対立を見ると、一見して、soとnotがともに文代用形式であり、しかも、肯定と否定で役割分担しているように見えるが、(38Bc)の応答形式も存在することから、実はそうではないと主張している。

(38) A: Do you think *they can come tonight*?

B: a. I believe so.

b. I believe not.

c. I don't believe so.

(中右(1994: 183))

中右(1994)の提案する意味構造は、(39)である⁶。

(39) A: [_{SM} DO YOU THINK] [_{P4} POS [_{P3} YOU CAN COME TONIGHT]]

B: a. [_{SM} I BELIEVE] [_{P4} POS [_{P3} SO]]

b. [_{SM} I BELIEVE] [_{P4} NOT] [_{P3} ϕ]]

c. [_{SM} I DON'T BELIEVE] [_{P4} POS [_{P3} SO]]

ここでは、命題内部がさらに四つの重層構造を成していることに注意されたい。命題内の階層構造は、(40)のように階層ごとに特定の意味機能を担っている。

(40) [_{P4} 極性 [_{P3} 時制 [_{P2} アスペクト [_{P1} 述語+項]]]]

命題の中心にあるのは、述語と項からなる中核の意味で、この単位は中核命題 PROP¹を形成する。中核命題にアスペクトが付加されると、全体として拡大命題 PROP²を形成する。これに、時制が付加されると、全体として中立命題 PROP³を形成する。さらに、これに極性が付加されると、全体として全体命題 PROP⁴

⁶ SMは文モダリティ (sentence modality) を、POSは肯定(positive)を表している。

を形成する。

ここで議論を(38)と(39)に戻そう。(39B)の意味構造が示すように、文代用形のsoが用いられる場合は、soが先行詞の中立命題PROP³と照応関係にあるが、否定辞notが用いられる場合は、空照応形が先行詞の中立命題PROP³と照応関係にある。中右はこの分析を支持する論拠を数多く示しているが、そのうちの一つが(41)に見られる照応現象である⁷。

(41) A: *Margaret won't be coming to the party then, will she?*

B: No, { a. I suppose not. / b. I don't suppose so. }

(ibid.: 185)

(42) A: [SM WILL] [P4 NOT [P3 MARGARET WILL BE COMING TO THE PARTY]]

B: a. [SM I SUPPOSE] [P4 NOT [P3 ϕ]]

b. [SM I DON'T BELIEVE] [P4 POS [P3 SO]]

(ibid.: 186)

(42Ba)が示すように、中立命題PROP³の空照応形は(42A)の中立命題に照応している。中立命題PROP³同士の間で同一指示関係が成立しているのがよく分かる。一方(42Bb)でも、中立命題PROP³の語彙的照応形であるsoが、(42A)の中立命題に照応していることがよく分かる。

中右の分析が示すように、soやnotが用いられるときは、それらが先行する命題内容の一部 (PROP³) を指し示す。これは、タイプ同一指示を意味する。一見して、文代用形の肯定版と否定版であるかのように見えるが、soは代用形であるのに対して、notは代用形ではなく否定辞である。

3. 2. 3 Cushingの例文や他の事例への応用

ここで、本稿の分析をCushingの言及している例文に当てはめてみよう。(43)(=(4))ではsoのみが許される。

(43) He said that *someday we would prove the existence of deep structure*, and I said, 'I hope { so / *it }.'

⁷ モダリティ領域内のWILLは予測判断を示し、命題領域内のWILLは純粋な未来時を示す。マーガレットがパーティーに来るのは未来の出来事であるのに対し、それを話し手が予測するのは発話時点の状況である(中右(1994: 186))。

(Cushing (1972: 186))

第一等位項と第二等位項の両方で同じ伝達動詞 say が用いられているので、対比的な情報的価値は補文命題にある。さらに、第一等位項の補文命題は仮定として提示されているので、その指示性は低い。このため、〈存在物〉として見立てるには不十分である。したがって、それを it によって指し示すことはできない。しかし、その記述内容を指し示すことは、まだ可能である。すなわち、命題内容の一部 (PROP³) を先行詞として捉え、真偽判断の対象としてその極性値を焦点化することは可能である。この場合の真偽判断の効力は、必然的に弱くなる。

同様の理屈で、(44)=(9) のような例も説明できる。

(44) George asked me whether *deep structure exists*; I said that I believed { so / *it }.

(ibid.: 186)

第一等位項の伝達動詞は ask で、その補文命題は ask の表す質問行為を補完している。この補文命題に対する真偽判断は保留されているので、その指示性は低い。このため、〈存在物〉として見立てるには不十分である。ここでも、それを it によって指し示すことはできない。しかし、その記述内容の一部を先行詞として捉え、あらたな真偽判断の対象として用いることは可能である。

同じ説明が(45)=(16)にも応用できる。ワイザックが「その車であそこまで行けますかね？」とファリス判事に尋ねるが、質問の対象となっている命題内容に対する彼の心的態度は、判断保留である。この種の命題は指示性が低いので、その内容を so で受けて、あらたな真偽判断を下すことができる。

(45) WEIZAK: *Will that thing get you there?*

THE JUDGE: Oh, I believe so, if I steer clear of the main-traveled roads.

(King, *The Stand*, Ch.55)

(46)=(2), (47)=(10), (48)=(11), (49)=(17) などに見られるように、誰かが言った内容の真实性をそれほど真剣に受け止めていない文脈では、so や not を用いてその命題内容を指し示し、真偽判断の対象とすることができる。

(46) MISS MARPLE: A beautifully proportioned house. Your sister tells me *it was built about 1780*.

C. BRADBURY-SCOTT: Yes, I believe so. One could wish, you know, it was not quite so large and rambling.

(Christie, *Nemesis*, Ch.8)

(47) KELLY: Don't you know *they'll be watching all the airports*?

DIANE: I hope so.

(Sheldon, *Are You Afraid of the Dark*, Ch.34)

(48) OLIVER: I swear *I don't know anything about what happened*.

TODD: I hope not.

(Sheldon, *The Best Laid Plan*, Ch.6)

(49) JESS: You had the pill, you said. I took you at your word. Was I so wrong?

FRANNIE: No. You weren't so wrong. But *that doesn't change the fact*.

JESS: I guess not.

(King, *The Stand*, Ch.2)

3. 2. 4 say/tellの補文に見られる so

残す問題は、(50)=(12)-(53)=(14)に見られるような、伝達動詞の補文に現れる so である。

(50) A: *The Finance Minister has resigned*.

B: Who said so?

(Quirk et. al (1985: 868))

(51) *Oxford is likely to win the next boat race*. All my friends say so. (ibid.: 880)

(52) *Jack hasn't found a job yet*. He told me so yesterday. (ibid.: 880)

ここでも、中右 (1994: 12.2 節) の議論を基に、彼の主張を採用したい。彼の主張は、伝達動詞の補部に現れる文代用形の so は、全体命題 PROP⁴ を指し示すというものである。これは、(53)に見られる照応現象が示すように、so は、否定命題を丸ごと指し示すからである。

(53) a. Perhaps *you don't love me*, and will have to tell me so.

b. *John hasn't found a job yet*. He told me so yesterday.

c. *Not everyone agrees, or so a literal reading might suggest.*

d. *At the earlier stage, the child did not have the capacity to use such items as 'do',
so is behavior indicates.*

(中右 (1994: 189))

伝達動詞の補文は直接話法に対応する伝達内容を含んでいるので、それが意味論的な島を形成する。それ故soは、その補文を、肯定・否定命題の違いを問わず、丸ごと受ける照応形式としてはたらくのである(中右 (1994: 190))。

4 結語

本稿では、it, so, notを用いた英語の文照応現象について論じ、その背後にある人間の認識を、認知意味論の観点から明らかにした。

itが事態pを前方照応的に指し示すとき、話し手(書き手)はpを<存在物>として見立てていると主張した。話し手(書き手)がpを<存在物>として見立てるのは、発話時において、pが三つの条件のどれかを満たすときである。第一の条件は、母型動詞がある種の伝達行為を表しており、その補文が事態pを既述しているときである。第二の条件は、話し手(書き手)が、pの真実性を前提としているときである。第三の条件は、話し手(書き手)が、pを事実だと確信しているときである。

真偽判断を表す述語がsoまたはnotを用いて先行する節を指し示すときは、中右(1994)の階層意味論モデルに基づく分析を採用し、それぞれ中立命題PROP³単位での代用形が関わっているとした。soが関わる照応現象では、soそのものが中立命題の位置づけをもち、先行する命題のPROP³を指し示す。notが関わる照応現象では、一方、notそれ自体は否定辞にすぎず、PROP³の位置づけをもつ空代用形が後続するとした。何れの場合も、先行する命題の内容を指し示しながら、その極性値を焦点化する現象である。

参考文献

- Cushing, Steven. 1972. The semantics of sentence pronominalization. *Foundation of Language* 9: 186-208.
- Dik, Simon C. 1997. *Theory of Functional Grammar*, 2 vols. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Hengeveld, Kees. 1989. Layers and Operators in Functional Grammar. *Journal of Linguistics* 25: 127-157.
- Hengeveld, Kees. 1990. The Hierarchical Structure of Utterances. In *Layers and Levels of Representation in Language Theory: A Functional View*, ed. by Jan Nuyts, A. Machtelt Bolkestein and Co Vet, 1-24. Amsterdam: John Benjamins.
- Kiparsky, Paul and Carol Kiparsky. 1971. Fact. In *Semantics: An interdisciplinary reader in philosophy, linguistics and psychology*, ed. D. D. Steinberg and L. A. Jakobovits, 345-369. Cambridge: Cambridge University Press.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- 中右 稔. 1994. 『認知意味論の原理』. 東京: 大修館.
- 中野弘三. 1993. 『英語法助動詞の意味論』. 東京: 英潮社.